九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

# NO OPEN ACCESS, NO SCIENCE：九州大学附属図書館OAサポートチームの挑戦

安田, さくら
九州大学附属図書館収書整理課雑誌情報係

北島, 光朗
九州大学附属図書館利用者サービス課理系参考調査係

髙橋, 啓
九州大学附属図書館利用者サービス課理系参考調査係

梶原, 瑠衣
九州大学附属図書館図書館企画課企画係

他

https://hdl.handle.net/2324/7387326

出版情報：Journal of College and University Libraries. 128, pp.2200-1-2200-10, 2025-09-30. Japanese Coordinating Committee for University Libraries
バージョン：
権利関係：2025 (c) Journal of College and University Libraries Editorial Board

KYUSHU UNIVERSITY

DOI: 10.20722/jcul.2200

# NO OPEN ACCESS, NO SCIENCE —九州大学附属図書館 OA サポートチームの挑戦—

Challenges of the OA Support Team at Kyushu University Library

安田 さくら[1]，北島 光朗[2]，髙橋 啓[3]，
梶原 瑠衣[4]，星子 奈美[5]，兵藤 健志[6]
Sakura YASUDA[1], Mitsuro KITAJIMA[2], Kei TAKAHASHI[3],
Rui KAJIWARA[4], Nami HOSHIKO[5], Kenshi HYODO[6]

**抄録**：九州大学附属図書館では，オープンアクセス（OA）の推進を目指し，2024年に課・係を越えたOAサポートチームを結成した。同チーム内に3つのサブチームを構成し，NO OPEN ACCESS, NO SCIENCEのキャッチフレーズのもと，本学の研究者を対象としたアンケート調査，OA啓発のための広報物作成，図書館職員向けの勉強会等の企画を行った。各サブチームが意欲的に活動を展開し，成果を上げたことにより，全学的なOA推進に向けた意識醸成の基盤を築くことができた。また，チームによる活動のプロセスを通じて，附属図書館内でのOA推進への機運が高まるとともに，図書館職員の成長を促す良い機会となった。

**キーワード**：オープンアクセス，Open Access（OA），チームワーク，チームビルディング，アンケート調査，広報，人材育成

## 1. はじめに

九州大学附属図書館（以下，「附属図書館」という）では，オープンアクセス（以下，「OA」という）の推進を目指し，2024年に課・係を越えたOAサポートチームを結成した。本稿ではまず，チーム結成に至るまでの背景として，九州大学（以下，「本学」という）におけるOAへの取組状況について述べる。次に，チーム構成や結成1年目における具体的な活動内容を報告する。最後に，OA推進の面での意義と成果を振り返るとともに，人材育成と成長の機会の観点からの意義を述べ，今後の展望を考察する。

### 1.1 OAに関する本学の状況

本学は2016年に「九州大学オープンアクセス方針」[1)]を策定し，在籍する研究者が公的研究資金を用いて得た成果は，九州大学学術情報リポジトリ（以下，「QIR」という）[2)]で公開することを公式に定めた。

2021年には，研究を所管する全学的な委員会の下に設置したジャーナル検討タスクフォースにて，Green OA（セルフアーカイビングによるOA）を推進しつつ，戦略的にGold OA（ジャーナルでの出版によるOA）を進めることを明確化した。

この方向性のもと，様々な施策を実行していたところであるが，2024年2月に内閣府から出された「学術論文等の即時オープンアクセスの実現に向けた基本方針」[3)]（以下，「即時OA義務化の基本方針」という）により，OA推進体制の更なる強化が求められた。

### 1.2 OAに関する附属図書館の状況と課題

附属図書館では，2018年に設置されたeリソース課において，Green OA，Gold OAの両方を所掌している。Green OAに関する業務は同課リポジトリ係が担当しており，QIRの運用・維持管理，データ登録，および登録推進のための各種業務を行っている。Gold OAに関する業務は同課eリソース管理係が担当しており，電子ジャーナルの契約，アクセス管理，利用分析等に加え，転換契約によるAPC（Article Processing Charge：論文掲載料）支援も実施している。

両係の業務実践を通じて，学内のOAに対する認知は徐々に進展してきたものの，まだ一部に留まっている状況が見受けられた。そのため附属図書館では，OA推進体制の強化に加えて，全学的な意識醸成も課題として認識していた。

本学が文部科学省による「オープンアクセス加速

化事業」（以下，「OA 加速化事業」という）[4]の採択を受けたことも契機となり，OA 関連業務を担当する図書館職員だけでなく附属図書館の全職員が関心を持ち，研究者や他部署職員と連携して OA を推進していくという意識のもと，2024年７月に，課・係を横断した「OA サポートチーム」を結成した。

## 2. OA サポートチームの結成

### 2.1 活動目標

OA サポートチームの活動期間は2029年までを予定している。活動目標は以下の３点である。

⑴ 本学の研究者および職員の OA に対する意識醸成・意識改革
⑵ 全キャンパスにおける，OA や研究成果発信に関する研究者支援体制の整備・充実
⑶ OJT を通じた，研究支援や学術情報流通に関する本学図書館職員の知識習得，資質・スキルの向上

### 2.2 メンバー構成

チームは，主査・副主査，各館からの選出メンバー，係として所属するメンバー，オブザーバで構成される（図１）。

活動目標の一つを「図書館職員の知識習得，資質・スキルの向上」としたように，OA サポートチームは当初より，図書館職員の人材育成も目的としている。そのため，主査・副主査は e リソース課の図書館職員ではなく，学習支援業務を担当する学術サポート室の図書館専門員および研修業務を担当する企画係の係長が担うことになった。

各館からの選出メンバーは，各キャンパスにおける研究者の相談対応や，各部局研究支援部署への情報共有の充実等を目的とし，中央図書館，理系図書館，医学図書館，芸術工学図書館，筑紫図書館の全館から参加を募った。OA 推進に関心を持ち，積極的に活動する意思のある者を求め，若手職員が参加しやすいように，職位，経験，業務内容は不問とした。

係として所属するメンバーは，1.1節で述べたリポジトリ係，e リソース管理係の図書館職員である。また，事務部長，e リソース課長等がオブザーバとして参加することになった。

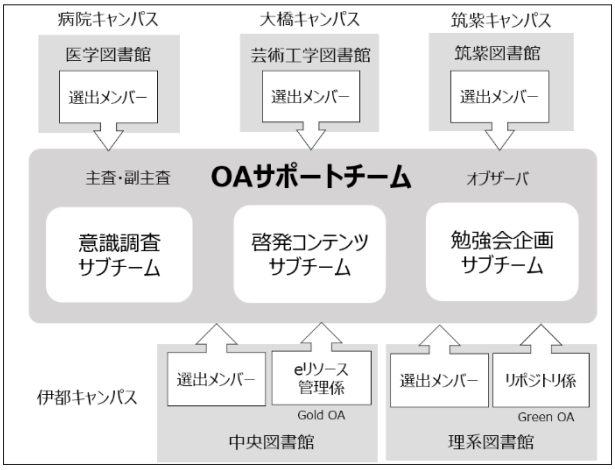


**図１** OA サポートチームの構成

### 2.3 メンバー決定から本格活動まで

８月上旬には，全館の職員約120名に向けて「OA 加速化キックオフ説明会」を開催し，e リソース課の課長および係長が，OA に係る動向，Green OA，Gold OA の概要を説明した。この説明会の中で，チームの結成目的や活動内容を改めて共有した。説明会開催から３日後，主査１名，副主査１名，選出メンバー11名，係として所属するメンバー６名，オブザーバ４名，計23名の体制が決定した。

OA 業務担当未経験のメンバーが大半であったことから，具体的な活動に入る前に，OA に関する基礎知識習得のための勉強会を計３回実施した（各回のテーマは５章表３を参照のこと）。e リソース課の図書館職員による講義や，初学者向けのおすすめ図書紹介，質疑応答等を通し，チームが活動を開始するための基本知識をメンバー内で共有した。

３回の勉強会を経た後，４回目のミーティングにて，「OA の主体は研究者であり，図書館がそれをサポートする」というチームのコンセプトをもとに，チーム名を「OA サポートチーム」に決定した。また，活動内容に応じたサブチームの構成と担当者も決定した。以後，月１回のペースで全体ミーティングを行い，進捗確認やサブチーム間の調整等を行っている。

第１回のミーティング冒頭では，主査から「OA 推進に関しての『分からない』も大事にすること。図書館職員が分からないことは研究者が分からないことでもある」という発言があった。理解を深め「分かる」感覚を得た後は忘れがちになるが，定期的に立ち戻るべき大切な言葉である。チーム活動開始から時間が経った今，ここに書き残しておきたい。

### 2.4　サブチームの構成

2.1節で述べた目標達成のため，当初より具体的な活動内容も策定していた。本学研究者のOAに関する意識調査の実施，OAに関するPRコンテンツ作成，OAに関連した勉強会や国内外の先行事例報告会の開催である。これを踏まえ，意識調査サブチーム，啓発コンテンツサブチーム，勉強会企画サブチームという3つのサブチームを設置した（図1）。

各サブチームには，選出メンバーを3～4名ずつ配置し，この中から各サブチームのチーフを決定した。係として所属するメンバーは，状況に応じて各サブチームに関与することとなった。主査，副主査，オブザーバも，緩やかに担当を決めて各サブチームに助言することになった。

各サブチームの活動内容については，3章，4章，5章で詳述する。なお，各章で表記するメンバー構成は，全て2024年8月時点のものである。

## 3. OAに関する意識調査アンケート・インタビューの実施

### 3.1　意識調査サブチームの概要

意識調査サブチームは，OAについての認識・ニーズを尋ねる全学的なアンケートの実施，アンケート回答者へのインタビューの実施を目的としたチームである。

選出メンバーの中から，中央図書館2名，芸術工学図書館1名，筑紫図書館1名が参加したほか，eリソース管理係1名，リポジトリ係2名が加わり，計7名を中心に活動した。

### 3.2　OA意識調査アンケートの概要・回答者数

OA意識調査アンケート（以下，「アンケート」という）の概要は下記の通りである。

・目的：本学における研究成果発信に関する支援体制の整備・充実を図るため，本学構成員のOAに関する認識およびニーズを把握すること
・対象：本学に所属する教員・大学院生（博士課程）等
・実施期間：2024年12月19日～2025年1月31日
・実施方法：ウェブ（Microsoft Forms）
・言語：日本語・英語
・設問数：最小26問～最大43問

なお，アンケート開始までのスケジュールは表1のとおりである。

**表1**　アンケート開始までのスケジュール

| 日程 | 内容 |
|---|---|
| 2024/10/7 | 内容の大枠を決定 |
| 2024/10/18 | 設問作成開始 |
| 2024/11/15 | 素案の完成 |
| 2024/11/19,20 | 館内の会議に素案を提出 |
| 2024/11/21,22,12/2 | テスト回答を依頼 |
| 2024/12/3-12/18 | 設問の最終調整 |
| 2024/12/19 | アンケート開始 |

### 3.3　アンケートの作成

#### 3.3.1　設問の作成

アンケートの大枠は表2のとおりである。メンバー1名につき1セクションを担当し，それぞれ設問を作成した。設問作成にあたっては，エディテージ（カクタス・コミュニケーションズ株式会社）が2024年に行った「即時オープンアクセス義務化に対する研究者意識調査」[5]を参考にした。作業にはGoogleドキュメントを用い，複数名が全体を見ながら同時に編集できるようにした。

**表2**　アンケート内容の大枠

| セクション | 内容 |
|---|---|
| 1 | 回答者の基本事項 |
| 2 | 自身の論文発表 |
| 3 | OAに関する理解・意識 |
| 4 | APC支援に関すること |
| 5 | リポジトリに関すること |
| 6 | インタビューへのご協力 |

素案の完成までは2週間に1回程度打合せを行い，アンケート全体の流れの整理や設問の精査を全員で行った。OAに詳しくない教員・学生にも伝わるよう，前提知識の説明や文言の平易さについても相互に確認を重ねた。

#### 3.3.2　設問の見直しと最終調整

初回ミーティングから約1か月後にアンケート素案が完成し，館内の会議に提出した。また，附属図書館研究開発室の教員，図書館TA（Cuter）[6]へテスト回答を依頼した。

その結果，「設問数が多く，回答に時間がかかる」「専門用語が頻出するため，OAについての知識がなければ回答が難しい」という指摘を受け，設問数を最大64問から最大43問へと削減するとともに，設問文もより平易な表現に修正した。

タイトなスケジュールであったが，打合せ以外でも，Googleドキュメントのコメント機能やプロジェ

クト管理ツール Backlog を使用して，メンバーが頻繁に連絡を取り合い，各設問について相互に確認を重ねた。その結果，当初の予定通り2024年12月19日に，アンケートを開始することができた。

### 3.4 アンケート広報

アンケートの広報は，主にメール送付とチラシ配付を通じて行った。また，全学の部局長が集まる会議にて，附属図書館長よりアンケートへの協力依頼を行った。

メールは，各部局の総務担当係のメーリングリストを通じて送信するとともに，時間を置いて，教員メーリングリストに対しても送付した。また，博士課程の学生に対しては，アンケート開始時に学生ポータルを通じてメールを一斉送信した。

チラシは，啓発コンテンツサブチームが作成し，全部局の教員のメールボックスに1,727部配付した（4.2節で詳述）。

### 3.5 アンケートの集計

アンケートの最終的な回答数は745であった。内訳は，教授・准教授367，講師・助教等190，研究員・医員・技術系職員等45，院生（博士）143となっている。対象となる教員の約28%（n=2,171），博士課程の大学院生の約５%（n=2,721）より回答を得た。

集計作業はメンバーで分担して行い，結果から何が言えるのか，全員で検討を重ねた。その結果，報告資料では全体的な傾向に加え，研究分野や職位など，属性ごとの課題や特徴も可視化できるようにする方針が定まった。

また，OA サポートチームの結成目的である「本学の研究者および職員の OA に対する意識醸成・意識改革」の趣旨に基づき，専門用語には注釈を加え，特に伝えたい点については文章でも補足することで，OA に関する理解が深まるよう配慮した。

### 3.6 アンケート結果

集計結果の全文は QIR で公開している[7]。本稿では，OA に対するイメージ・意見について，即時 OA 義務化の基本方針の認知度についての回答のみ紹介する。なお，下記に示す回答数は，教員に限った回答数（n= 602）である。

OA に対するイメージを問う設問の回答結果を図２で示す。ポジティブな回答は赤で，ネガティブな回答は青で表している。ポジティブな回答が多かった一方で，費用面への懸念を示す回答も少なくなかった。

また，OA について感じていること・意見について問う自由記述の設問では，OA が論文投稿費や購読料の高騰に対抗する仕組みとなることへ期待する意見も見られた。

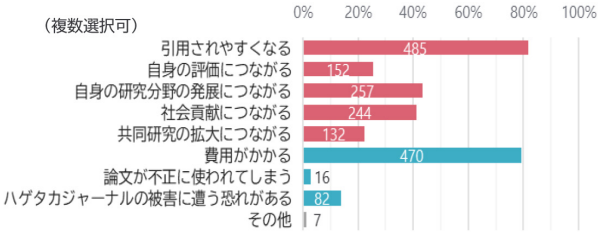


**図２** OA に対するイメージ（n=594）

即時 OA 義務化の基本方針を知っていると回答した教員は280名で，教員の回答総数の約47% となった。また，知っていると回答した教員のうち，約71％が「対象は2025年度から新規に公募する競争的研究費（JST,JSPS,AMED）による研究成果である」ことを知っていると回答した。しかし，そのほかの具体的な要件についての認知度はいずれも50%を下回った（図３）。

義務化にあたり大学に求めるサポートを問う設問では，費用補助や作業負担の軽減を求める意見が多く寄せられた（図４）。

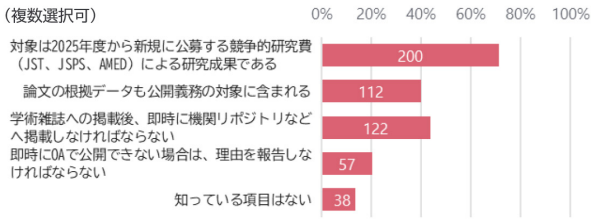


**図３** 「即時 OA 義務化の基本方針」各要件の認知度（n=280）

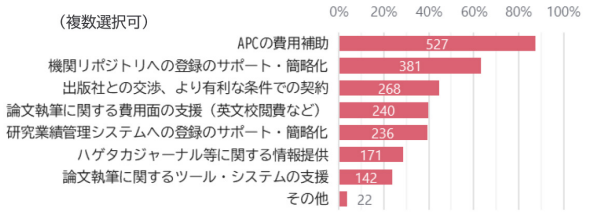


**図４** 即時 OA 義務化にあたり，大学に求めるサポート（n=602）

これを受けて，即時 OA 義務化の基本方針の諸要件の周知徹底を図るため，研究者に対する説明会を実施予定である。

また，上述した設問に加え，QIR や APC 支援についての意見やニーズも尋ねている。これらの回答は，今後，リポジトリ係や e リソース管理係の業務改善につなげていく。

### 3.7　インタビューの実施

2025年３月から，アンケートでインタビュー可能との回答があった教員に対し，分野や研究者に固有の実情やニーズの把握を目的としたインタビューを実施している。2025年６月末時点で，病院，研究所等も含む13部局の教員18名に対して，インタビューを行った。

インタビュー形式は，事前に準備した質問リストに基づく半構造化インタビューである。アンケートの回答内容を深掘りする質問のほか，論文出版までの研究プロセスや，図書館が研究者向けに発信すべき情報についてなど，アンケートでは触れていない内容についても尋ねている。

教員と直接対話することにより，分野によって著者最終稿への考え方が異なるなどの具体的な状況が把握できたほか，学術雑誌の編集委員等，様々な立場からのOAについての意見が得られている。今後も継続してインタビューを行いつつ，結果は随時OAサポートチーム以外の図書館職員にも共有し，今後のOA推進活動や附属図書館の業務全般に活かしていきたい。

## 4. OAに関するPRコンテンツ作成

### 4.1　啓発コンテンツサブチームの概要

啓発コンテンツサブチームは，研究者および学内関係者に対し，OAに関する認知と理解を促進することを目的として設置された。広報用チラシやウェブページの作成に加え，キャッチフレーズやPRグッズの製作にも取り組んだ。

選出メンバーの中から中央図書館２名，理系図書館１名，医学図書館１名が参加したほか，eリソース管理係１名，リポジトリ係２名が加わり，計７名を中心に活動した。

### 4.2　アンケートのチラシ作成

３章で記したアンケートのチラシを日英両言語で作成した。

少しでも多くの回答を集めるため，メール配信での周知に加え，全教員宛に紙のチラシも配付することを計画した。いかに目を留めてもらうかを意識して，サブチーム内で様々なデザイン案を出し合い，冒頭に「あなたの研究成果の発信，支援させてください」と大きく配置すること，回答者へのお礼品（4.4.3項で詳述）について記載すること，比較的上質な紙質で製作する等の工夫を施した（図５）。

**図５**　OA意識調査アンケートのチラシ

チラシは，各部局の総務担当係への配付を依頼するのに加え，OAサポートチームのメンバーで教員メールボックスへポスティングする等，様々な手段で配付した。その結果，全キャンパスのほぼすべての教員に配付することができた。

３章で述べたインタビューに協力した教員からは，「アンケートのことをチラシで知った」，「チラシが普通のコピー用紙でなく質のよいものだったので目に留まった」といった声が寄せられ，地道なポスティングに広報の効果があることがわかった。また，チラシ配付に際し各部局とやり取りをしたことで，「附属図書館がOAの活動を行っている」と学内に認知される機会を作ることもできた。

### 4.3　ウェブサイトの改訂

附属図書館のウェブサイトでは，OAに関する全般的な説明や，リポジトリへの登録方法，APC支援，関連用語の解説などの情報を発信している。これらの情報に利用者がスムーズにたどり着けるよう，ウェブページの導線改善に取り組んだ。

サブチームのメンバーで調べた様々なウェブサイトを参考にし，OA関連のページを集約したフロントページ[8]を作成した（図６）。併せて，図書館トップページのメニューに複数並んでいたOAに関する項目を「研究成果の公開」という項目にまとめ，このフロントページに案内するようにした。

**図 6**　OA フロントページ「研究成果の公開」

## 4.4　キャッチフレーズ考案，PR グッズ製作

### 4.4.1　キャッチフレーズ「NO OPEN ACCESS, NO SCIENCE」の誕生

PR グッズを製作するにあたり，OA 啓発に繋がるようなキャッチフレーズを考案した。OA サポートチーム全体で発案と投票を行い，附属図書館長の意見も加味した結果，「学術成果がオープンでなければ，科学は発展しない」という意味合いの「NO OPEN ACCESS, NO SCIENCE」というキャッチフレーズが誕生した。キャッチフレーズを検討する過程を経て，このような信念をもって OA を推進していこうという，チーム全体の意識共有ができた。

### 4.4.2　キャッチフレーズのロゴデザイン制作

前述のキャッチフレーズを，今後の広報活動で有効活用できるよう，ロゴデザインを作成した。

既に世界的に認知されており，開錠を意識したデザインの OA ロゴマークと，キャッチフレーズ「NO OPEN ACCESS, NO SCIENCE」を含むことを要件とし，OA ロゴと同じく丸みを帯びたデザインフォントのものに決定した（図 7）。文字の一部が目のデザインとなっており，OA となった学術成果を見ていることを連想させる。様々な用途で活用できるよう，縦横比を変えた複数パターンを制作した。

なお，当 PR ロゴは，学外も含めあらゆる機関での OA 啓発活動に広く活用されることを願い，2025 年 6 月にパブリックドメインとして，当館ウェブサイトより公開した[9)]。

NO OPEN ACCESS,
NO SCIENCE

**図 7**　PR ロゴ

### 4.4.3　PR グッズ製作

学内の OA に対する認知と理解を高めることを目的として，キャッチフレーズの「NO OPEN ACCESS, NO SCIENCE」を用いた PR グッズを製作した。グッズを手にした人が学内外で日常的に持ち歩くことで，目に触れる機会が増えるよう，クリアファイル，ボールペン（写真 1），トートバッグ（写真 2）の 3 種類のグッズを作成した。

クリアファイルとボールペンは，3 章で述べたアンケートの回答者に配付した。アンケート回答完了画面にキーワードを記し，各図書館のカウンターで回答者がキーワードを申告して受け取れるようにした。また，トートバッグは，図書館や研究支援部署の職員，理事等の関係者に配付した。丈夫で使いやすいと好評を得ており，職員や理事等の学内外での移動時に幅広く活用され，OA 推進活動の PR に役立っている。また，バッグを渡した教員が「OA に力を入れている九大からバッグをもらった」と写真付きで X に投稿し，50件近くのリポスト，10,000件近くのエンゲージメントを得たケースもあった。

**写真 1**　クリアファイル・ボールペン

**写真 2**　トートバッグ

### 4.5　広報の取り組みによる効果

アンケートのチラシや，トートバッグなどは，受け取った教員から反響があり，OA のプロモーションに一定の効果があったと考えられる。

また，各種コンテンツの作成を通し，OA サポートチームのミッションが目に見える形で具現化したことは，チーム全体として今後の方向性を共有する上でも大きな意義があった。

## 5.　勉強会・出張調査報告会・スキルアップ研修の企画・実施

### 5.1　勉強会企画サブチームの概要

勉強会企画サブチームは，本学図書館職員の OA に関する知識の習得やスキル向上，ならびに国内外の先行事例の共有を目的とした勉強会・出張調査報告会・スキルアップ研修を企画・実施している。

メンバーは，中央図書館の入職 1 ～ 5 年目までの図書館職員 3 名である。各回のテーマや開催日時・実施方法・ 会場等は，OA サポートチームのメンバーを中心に，図書館職員から寄せられたアイデアや要望等を参考に決定している。また，サブチームのメンバー 3 名のうち 2 名は OA に関する業務経験がなく，OA 初学者としての視点を活かしてテーマを検討している。

各企画は，基本的にはハイブリッド形式（対面／オンライン）で行い，OA サポートチーム以外の図書館職員でも参加・視聴可能としている。また，当日参加できなかった図書館職員も，資料や録画を後日閲覧できるようにしている。

2025年 6 月までに実施した勉強会・出張調査報告会・スキルアップ研修を表 3 に示し，以降の節でこれらについて詳述する。

**表 3**　勉強会・出張調査報告会・スキルアップ研修実施一覧（2025年 6 月現在）

| 実施日時 | テーマ |
|---|---|
| 勉強会 | |
| 2024年 8 月27日<br>14:00~15:00 | OA 加速化勉強会 第 1 回<br>「機関リポジトリ」 |
| 9 月19日<br>15:00~16:00 | OA 加速化勉強会 第 2 回<br>「機関リポジトリ業務の実演，転換契約の業務＋ α 」 |
| 9 月24日<br>15:00~16:00 | OA 加速化勉強会 第 3 回<br>「研究データ管理」 |
| 12月20日<br>13:30~14:30 | 「有識者へのインタビュートークの会」 |
| 2025年 1 月14日<br>13:30~14:30 | 「OA 超入門」 |
| 2 月 5 日<br>10:00~11:30 | 「OA 昔話の会（オールドストーリー）」 |
| 出張調査報告会 | |
| 2024年 8 月22日<br>15:00~16:00 | 【オーストリア】（2024年 7 月25日～ 7 月27日）<br>ウィーン工科大学等<br>【イギリス】（2024年 7 月29日～ 8 月 2 日）<br>リーズ大学等 |
| 10月30日<br>10:30~11:30 | 【オーストラリア】（2024年 9 月11日～ 9 月21日）<br>シドニー大学等 |
| 11月27日<br>11:00~12:00 | 図書館総合展2024（2024年11月 5 日～11月 7 日） |
| 12月25日<br>10:30~11:30 | 【アメリカ】（2024年11月11日～11月15日）<br>チャールストン会議（サウスカロライナ州） |
| 2025年 5 月21日<br>11:00~12:00 | 【ドイツ】（2025年 3 月 5 日～ 3 月11日）<br>ミュンヘン大学等 |
| 5 月29日<br>11:00~12:00 | 【オランダ】（2025年 2 月16日～ 2 月21日）<br>IDCC25（The 19th edition of the International Digital Curation Conference）等 |
| スキルアップ研修 | |
| 2025年 3 月17日<br>9 :30~16:30 | 「コミュニケーションスキル向上研修：内気を活かそう，ヒアリング手法を学ぼう」 |
| 3 月21日<br>9 :30~16:30 | 「デザインスキル向上研修：身につく！基礎とクリエイティブディレクション」 |

### 5.2　勉強会

勉強会の実施目的は，OA 関連の基礎知識の向上や理解の深化である。これまでに，2.3節で述べた計３回の勉強会の後，基礎知識を振り返る機会として「OA 超入門」を開催した。そのほかにも，機関リポジトリの立ち上げが日本国内で始まった2000年代初頭の状況を当時の業務担当者が語る「OA 昔話の会（オールドストーリー）」等を実施した。今後は，各図書館窓口での問い合わせ等，具体的な相談対応を想定した勉強会等を実施予定である。

### 5.3　出張調査報告会

国内外への出張調査を行った図書館職員が訪問先で得た，OA に関する知見やグッドプラクティス等について図書館全体に共有し，研究者・大学院生等に対する OA 推進・支援等に活用することを目的に，報告会を実施している。

これまでに実施した報告会では，オーストラリアにおける大学院生を対象とした研究データ管理の意識醸成，政権交代によるアメリカの OA 政策への影響，ドイツにおける転換契約や OA 出版支援等，最新のトピックについて情報共有を行った。

### 5.4　スキルアップ研修

図書館内部だけでは涵養し難い OA 推進に有用なスキルの習得・向上を目的に，外部の研修講師を招聘して，「コミュニケーションスキル向上研修」，並びに「デザインスキル向上研修」を実施した。

両研修は，OA サポートチームメンバーが主な対象であったが，メンバー以外の図書館職員にも受講を募るとともに，講義やグループワークの様子を図書館内にライブ配信した。

#### 5.4.1　コミュニケーションスキル向上研修

本研修は，研究者に対するインタビューや相談対応といった場面を想定したものである。企業における営業担当者の説明，交渉スキル向上を目的とした研修を，研究者への説明や相談対応に応用できるようアレンジして実施した。グループワークを通して受講者がお互いに説明しあい，フィードバックを受けることにより，コミュニケーションの良い点や改善点について客観的な気付きを得る機会となった。

#### 5.4.2　デザインスキル向上研修

本研修は，デザインやクリエイティブディレクションの基礎知識を学ぶとともに，OA 推進用の広告媒体（チラシ，ポスター，ウェブページ等）を作成するにあたり有用となるデザインスキルの習得・向上を図るものである（写真３）。研修では，既に附属図書館で作成・配付していた OA 関連の啓発チラシを素材にグループワークを行い，チラシの改善点について議論した。

**写真 3**　デザインスキル向上研修

### 5.5　勉強会等の実施による効果

本章で紹介した取組みは，附属図書館全体の OA 関連知識の向上やスキルアップに寄与した。具体的には，OA サポートチームの活動に成果として表れている。たとえば，デザインスキル向上研修で得たスキルは，図書館作成の既存 OA 啓発チラシ「いま知ってほしいオープンアクセス：学術雑誌論文編」のブラッシュアップ，COAR Annual Conference 2025に出展した OA サポートチーム活動紹介ポスター[10]の作成に活かすことができた。

## 6. おわりに

### 6.1　活動の意義と成果

本稿では，OA 推進を目的として附属図書館に組織された OA サポートチームの活動について報告した。全キャンパスから図書館職員が集まり，課や係を横断したチーム編成が実現できたことで，「図書館全体で OA に取り組む」という意識がチーム内に浸透した。また，OA 業務に精通した担当者の知識や経験と，OA 業務未経験の図書館職員が持つ素朴な疑問や新たな視点が融合することで，多角的な意見交換が可能となり，OA に対する理解と関心が深まった。

サブチームで分担した活動を通じて，OA 加速化事業を受けての本学の計画も順調に進行し，活動目標を十二分に達成した。これらの取り組みにより，全学的な OA 推進に向けた意識醸成の基盤が築かれたことは，チームの活動１年目における重要な成果であったといえる。

### 6.2　人材育成と成長の機会

OAサポートチームの活動は，人材育成の観点からも大きな意義を持った。若手職員からは，日本の学術政策において大きなトレンドとなっているOAというテーマに実践的に関わり，勉強会の企画や講師，出張報告等を通じて，受け身ではない学びの機会を得るとともに，視野を広げることができた，との発言が得られたことが大きな収穫であった。このような経験により，若手図書館職員のモチベーション向上と経験値の底上げが図られ，大きな課題へのチャレンジに不可欠なプロジェクト遂行能力の向上にもつながった。

また，勉強会や研修で得た知識を即座に実務へ活かす流れも確立された。出張報告会で学んだOAについての国内外の最新動向や，スキルアップ研修で学んだ，デザインスキル・コミュニケーションスキルは，啓発コンテンツの作成やインタビューの実施にも反映されている。

### 6.3　今後の展望

活動２年目となる2025年度の展望として，チーム体制の強化が挙げられる。人事異動を経て24名体制となり，異動後もメンバーが役割を変えながら継続的に参加することで，知識と経験の継承を図っている。

また，副主査を２名体制とし，主査・副主査が各サブチームに所属してマネジメントを行う体制とした。サブチーム構成は維持しつつ，たとえば啓発コンテンツサブチームを「啓発企画実施チーム」とする等，活動内容に応じて名称を変更することで，機動力と柔軟性を活かした組織運営を目指す。

今後は，学術論文等の即時OA義務化の本格的開始を控え，各部局の教員や研究支援担当職員へのさらなるアプローチ，ならびにOAサポートチーム以外の図書館職員への即時OA義務化に関する基本的な情報提供が求められる。2025年６月に本学で研究者を対象とした科研費説明会が開催された際は，図書館職員が即時OA義務化の基本方針と論文著者に必要な対応について説明する時間が設けられた。これを嚆矢として，各部局教授会等での説明会実施を企画する予定である。

また，図書館職員の継続的なモチベーション維持と人材育成の仕組み化も重要な課題である。これらに取り組むことで，より一層のOA推進と図書館職員のスキル向上を目指す。

### 付記

本稿で述べたOAサポートチームによる活動は，文部科学省による「人工知能等社会実装研究拠点事業費補助金（オープンアクセス加速化事業）」[11]より支援を受けた。

---

参考文献

1）九州大学オープンアクセス方針．https://www.lib.kyushu-u.ac.jp/ja/services/open/qir/oa_policy,（参照2025-06-27）.

2）九州大学学術情報リポジトリ（QIR）．http://catalog.lib.kyushu-u.ac.jp/ja/search/browse/papers,（参照2025-06-27）.

3）内閣府．“学術論文等の即時オープンアクセスの実現に向けた基本方針”．2024-02-16．https://www8.cao.go.jp/cstp/oa_240216.pdf,（参照2025-06-27）.

4）文部科学省．オープンアクセス加速化事業の公募開始について．https://www.mext.go.jp/b_menu/boshu/detail/1421775_00008.htm,（参照2025-06-27）.

5）エディテージ．“支持する研究者は現状35％。即時OA義務化の現状と今後に向け大学に求められる施策とは。研究者1,012名を対象とした調査結果の詳細を公開”．Editage Blog．2024-10-24．https://www.editage.jp/blog/details-of-attitude-survey-on-immediate-oa-obligation/,（参照2025-06-27）.

6）九州大学附属図書館．“図書館TA（Cuter）：Cuter紹介”．Cute.Guides．2025-06-16．https://guides.lib.kyushu-u.ac.jp/cuter,（参照2025-06-27）.

7）九州大学附属図書館OAサポートチーム．“オープンアクセスに関するアンケート調査2024”．九州大学学術情報リポジトリ（QIR）．2025-05-21．https://hdl.handle.net/2324/7357477,（参照2025-06-27）.

8）九州大学附属図書館．“研究成果の公開”．九州大学附属図書館．2025-06-25．https://www.lib.kyushu-u.ac.jp/ja/services/open/open,（参照2025-06-27）.

9）九州大学附属図書館．“オープンアクセスPRロゴ”．九州大学附属図書館．2025-06-25．https://www.lib.kyushu-u.ac.jp/ja/services/open/oalogo,（参照2025-06-27）.

10）九州大学附属図書館OAサポートチーム．“‘NO OPEN ACCESS, NO SCIENCE’: Kyushu University Library’s Initiatives”．九州大学学術情報リポジトリ（QIR）．2025-05-12．https://hdl.handle.net/2324/7362152,（参照2025-06-27）

11）研究振興局参事官（情報担当）付学術基盤整備室．“オープンアクセス加速化事業の公募開始について”．文部科学省．2024-03-26．https://www.mext.go.jp/b_menu/boshu/detail/1421775_00008.htm,（参照2025-07-24）

＜2025.8.5 受理＞

1　やすだ　さくら　九州大学附属図書館収書整理課雑誌情報係
2　きたじま　みつろう　九州大学附属図書館利用者サービス課理系参考調査係
3　たかはし　けい　九州大学附属図書館利用者サービス課理系参考調査係
4　かじわら　るい　九州大学附属図書館図書館企画課企画係
5　ほしこ　なみ　九州大学附属図書館利用者サービス課学術サポート室
6　ひょうどう　けんし　九州大学附属図書館ｅリソース課
https://orcid.org/0000-0003-3675-1271